D−4　児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について（第9報）(2)　離乳開始の時期と知能　宮崎大教育　○秋山露子

目的　1962年以来，乳児期の栄養と知能発達との関係について各年令層別に検討し1971年総括した結果を報告したが今回は1973年調査の小学生442名，中学生470名を対象として調査し前報告と比較検討した。

方法　知能は教研式新制学年別知能検査による知能偏差値を用い，乳児期の栄養法は生後6ヶ月以内の栄養法別に分類した。

結果．小学生442名，中学生470名計912名を対象として乳児期の栄養法を生後6ヶ月以内の栄養法別に母乳栄養，混合栄養，人工栄養群の三つに分類した。知能は教研式学年別検査による知能検査を用いた。乳児期の栄養法と離乳開始の時期と知能発達との関係について検討し，更に1971年値と比較検討したところ次の結果が得られた。1)離乳開始の時期別による児童の平均知能偏差値は9ヶ月以内離乳開始の者が最も高く，月令が進むにつれて概ね劣る傾向が認められた。2）乳児期の栄養法別では小学生の場合は何れの栄養群も9ヶ月以内離乳開始の者が平均知能偏差値が高く，栄養群別では母乳栄養群が最高で混合，人工栄養群の順で9ヶ月以後も同様であった。中学生では平均知能偏差値は離乳開始9ヶ月以内，9ヶ月以後共に混合栄養群が最も高く9ヶ月以後では人工栄養群が最も高かった。3)知能偏差値極上位（70≦）の分布は9ヶ月以内離乳開始では小学生は母乳栄養群の分布が最も多く，混合，人工栄養群の順で9ヶ月以後は何れの栄養群も皆無であった。中学生では9ヶ月以内，9ヶ月以後共に混合栄養群の分布が最も多く，9ヶ月以後は人工栄養群のみその分布が9ヶ月以内に比べて増加していた。